



No. 142

ティークレイク

Tea Break

笑顔の裏側に

たった10cm程度の段差を、それが怖くて超えられない子供達が居る。ときには奇声を上げたり、突然泣き出したりと、身障者の体育会の催しは、ちょっとした独特の雰囲気がある。かく言う私も、障害者の娘を持ったことが無かったら、一生涯それを知らずに過ごしたことであろう。

ここに来る親達の殆どは、母親とその両親。父親の姿が見れるのは稀であったように思う。この点が、父親の育児参加がもてはやされ、流行りともなっている健康人のそれと異なるようである。

身障者を持つ家という、家族が一丸となってそれに立ち向かうドラマのような様子を想像するかもしれない。けれども、現実には、それとは全く逆である。実際に、子供が生まれるくらいの夫婦は、年齢がまだ若く、経験も所得も十分ではないがゆえに、突然に突きつけられた現実に対処できるだけの能力を備えていない。

現に、特に男性のほうはその目の前の現状を受け入れることができず、逃避する人も多い。その結果として、結構な数の夫婦が離婚に至る。これが現実である。

その中で、仕事に逃避した人の中には、大成功する人もいる。知財業界の中での成功者として知られるある人が、息子さんのことを話して下さった。彼は、笑顔で、「身障者の息子を持って、自分は、不運だと思ったことはあるが、不幸だと思ったことは無い」と言っていた。

健康な子を持った親というのは、自分ら親子に対して哀れみを言うてくる人達に対抗するため言葉を持つ必要はない。また、「五体満足で生まれれば、それでよい」などというのが心ない言葉であるという自覚はない。障害児をもった親の笑顔というのは、表側だけではない。

離婚した男親で身障者の催しに出るのはまだましなほうなのではあるが、それにしても数が少ない。そして子供らは、そうした男親を見つけると、満面の笑顔で寄ってくる。そう、この子供達は、たまにしか会えない、自分を本当に可愛がってくれる人のために、無理をしてまで可愛くする。こうした子供達の笑顔にも裏側がある。

ところで、先日は、ある会社の創立20周年のパーティーに招かれた。設立以来、一度も赤字を出したことが無く、自己資本比率も格段に良い。本当に、輝かしい業績である。また社長は、ミュージシャンとしても活躍されており、コンサートの開催も行っているという。この社長の自身の年齢も、息子の年齢も同じくらいだということ、私とは何かと気が合う。

そこにお祝いの挨拶を述べに別の客がやってくる。家族の話となり、「いや、まだそんなに小さいお子さんがいらっしゃるのですか...」。それを満面の笑顔で迎える社長の顔が少しだけ曇ったのを見逃さない。

この表情は、実は、子供を亡くした親にしかできない表情である。彼は、そのときの悲しみを紛らすために仕事に打ち込み、音楽に逃避した。でも今日は、そんな犠牲を払ってまでも成し遂げた成功をお祝いする日である。社長は、満面の笑みを浮かべながら、「いや、やはり色々あって...」と言って、別のグループのところに向かって歩き出した。その笑顔の裏側には、どことなく悲しそうな後ろ姿がある。

パーティーが終わって家路につくと、家では子供達が待っていた。それこそ満面の笑みを浮かべて飛びついてくる。この子供達の笑顔の裏側には、何も無い。この子供達は、自分たちに障害者の姉が居たことなど知らない。もちろん、自分たちの笑顔に応える父親の笑顔の裏側のことなど、想像もできない。

むろん、現実というものは教えるべきだと思うし、そのほうが真に子供らのためだとアドバイスしてくれる人もいる。それはもっともだと思うし、頭では理解できるのだけれども、この裏側の無い満面の笑顔というものは、いつでも簡単に裏打ちすることができてしまう。また、そうならざるを得ない状況もいつかは必ず招来する。それが現実である。そして、裏側の無いことの稀少が分かるだけに、いつも、言おうと思っても言いそびれて、言い出せないままである。(正)